

神送り遺跡

特定交通安全事業 伊那－辰野(停)線の
拡幅事業に伴う発掘調査報告書

1990

長野県辰野町教育委員会



序

神送り遺跡は平出区2097番地他に存在し、昭和48年には中央自動車道の建設に伴って調査が実施され、平安時代中頃の住居址が3基出土しています。この平出地区は中央自動車道建設当時の発掘調査では沢入口・沢頭・藤の森遺跡といったいわゆる平安時代の開墾集落と考えられる集落跡が出土したのをはじめ、辰野東小学校の校舎改築工事に伴って調査された古墳時代から平安時代にかけての集落跡である半平蔵遺跡や、この集落に関連があると思われる御社宮司古墳、御陵ヶ塚古墳などが分布しています。

また半平蔵遺跡では金環、菅玉などを出土する住居址もあり、古代の御牧である平井手牧との繋がりも考えられる大変重要な遺跡でもあります。

今回の発掘調査は城前交差点の改良工事に伴って実施され、平安時代中頃の住居址が2基出土しました。この調査により神送り遺跡の北限を確認することができ、遺跡の範囲確認ということに関しても非常に貴重な成果をあげることができました。

ここに調査報告書を刊行するはこびとなり、ご指導を賜った長野県教育委員会文化課をはじめ伊那建設事務所、それに直接調査に従事された調査団の皆様に深く感謝申し上げるとともにこの報告書が広く活用されることを願う次第です。

平成3年3月

辰野町教育委員会

教育長 小林 晃 一

例 言

1. 本書は特定交通安全事業、伊那ー辰野（停）線の拡幅事業に伴う長野県上伊那郡辰野町大字平出2097番地に所在する神送り遺跡^{かみおくり}の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は伊那建設事務所長小池義幸及び辰野町長小沢惣衛と、辰野町教育委員会教育長小林晃一との委託契約に基づいて行われた。なお発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は平成元年11月13日から12月11日及び平成2年11月20日から12月4日まで現場作業を実施し、出土遺物等の整理及び報告書の作成は平成2年12月4日より平成3年3月25日まで辰野町教育委員会で行った。
4. 発掘調査現場における記録は、遺構等の実測は大森淑子、田畑幸雄が主として行い、遺物等の実測図作成は佐藤直子、福島永が主として行った。土器復元は福沢幸一氏にお願いした。
5. 遺構の番号については今回改めて通し番号をつけ、中央自動車道建設時における調査とは別とした。

発掘調査関係者名簿

1. 神送り遺跡発掘調査団

調 査 団 長 友野良一（考古学研究者 宮田村）
調 査 員 福島永（辰野町教育委員会社会教育課 文化係）
発 掘 協 力 者 大森淑子・上島元彦・茅野安男・山崎馨
整 理 作 業 協 力 者 宇治ひろゑ・大槻直子・大森淑子・工藤信子・佐藤直子・白鳥栄子
田畑三千代・村上茂子・福沢幸一

2. 教育委員会事務局

教 育 長 小林晃一
社会教育課長 小松弘茂（～H2. 3. 31）
三浦正義（H2. 4. 1～）
文化係長 平泉栄一
文 化 係 田畑幸雄・福島永

目次

| | |
|-------------------------|----|
| 序 | |
| 例言 | |
| 第I章 発掘調査の経緯 | |
| 第1節 保護協議の経過 | 1 |
| 第2節 発掘調査の経過 | 1 |
| 第II章 遺跡の位置と環境 | |
| 第1節 地理的環境 | 3 |
| 第2節 歴史的環境 | 3 |
| 第III章 発掘調査 | |
| 第1節 調査の方法と調査結果の概要 | 7 |
| 第2節 遺跡の層序 | 7 |
| 第IV章 遺構と遺物 | |
| 第1節 平安時代の遺構と遺物 | 11 |
| 第V章 結語 | 15 |
| 参考文献 | |
| 写真図版 | |

挿 図 目 次

| | | |
|------|------------------------|----|
| 第1図 | 辰野町段丘面区分図 | 2 |
| 第2図 | 遺跡位置図 | 4 |
| 第3図 | 周辺遺跡分布図 | 6 |
| 第4図 | 発掘調査位置図 | 8 |
| 第5図 | 発掘調査区土層断面図 | 9 |
| 第6図 | 第1号住居址出土遺物 | 11 |
| 第7図 | 第1号住居址実測図 | 12 |
| 第8図 | 第2号住居址出土遺物 | 13 |
| 第9図 | 第2号住居址実測図 | 14 |
| 第10図 | 中央自動車道用地内出土の土器（第1号住居址） | 15 |
| 第11図 | 中央自動車道用地内出土の土器（第3号住居址） | 16 |
| 付 図 | 神送り遺跡調査区平面図 | |

写 真 図 版 目 次

| | |
|-------|------------|
| 図版1-1 | 元年度分全体写真 |
| 図版1-2 | 2年度分全体写真 |
| 図版2-1 | 第1号住居址 |
| 図版2-2 | 第2号住居址 |
| 図版3-1 | 第1号住居址出土遺物 |
| 図版3-2 | 第1号住居址出土遺物 |
| 図版4-1 | 第2号住居址出土遺物 |
| 図版4-2 | 第2号住居址出土遺物 |

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 保護協議の経過

神送り遺跡は昭和47年の中央自動車道の建設に伴う圃場整備事業において弥生土器・土師器等が出土し、翌年の昭和48年に建設予定地内において発掘調査が実施された。その後この遺跡は開発の手からはのがれてきていた。

しかし平成元年5月になり城前交差点の拡幅事業を行う旨の連絡をうけ、8月に保護協議を辰野町教育委員会と辰野町役場建設課との間で実施した。その結果、町単独事業と県単独事業の二種類を時期を分けて行い、平成元年度事業として町単独事業の約100㎡が実施されることが判明した。このため町教育委員会では11月に予定地内の発掘調査を開始することとし、11月13日より12月11日まで調査を行った。

翌年の10月22日に県単独事業分の建設予定地について長野県教育委員会文化課、伊那建設事務所、町教育委員会の三者によって保護協議を実施し、その結果、前年に住居址が出土していることなどもあり、本調査を実施することとし、11月8日に委託契約を締結し、11月20日より12月5日まで調査を実施した。

第 2 節 発掘調査の経過

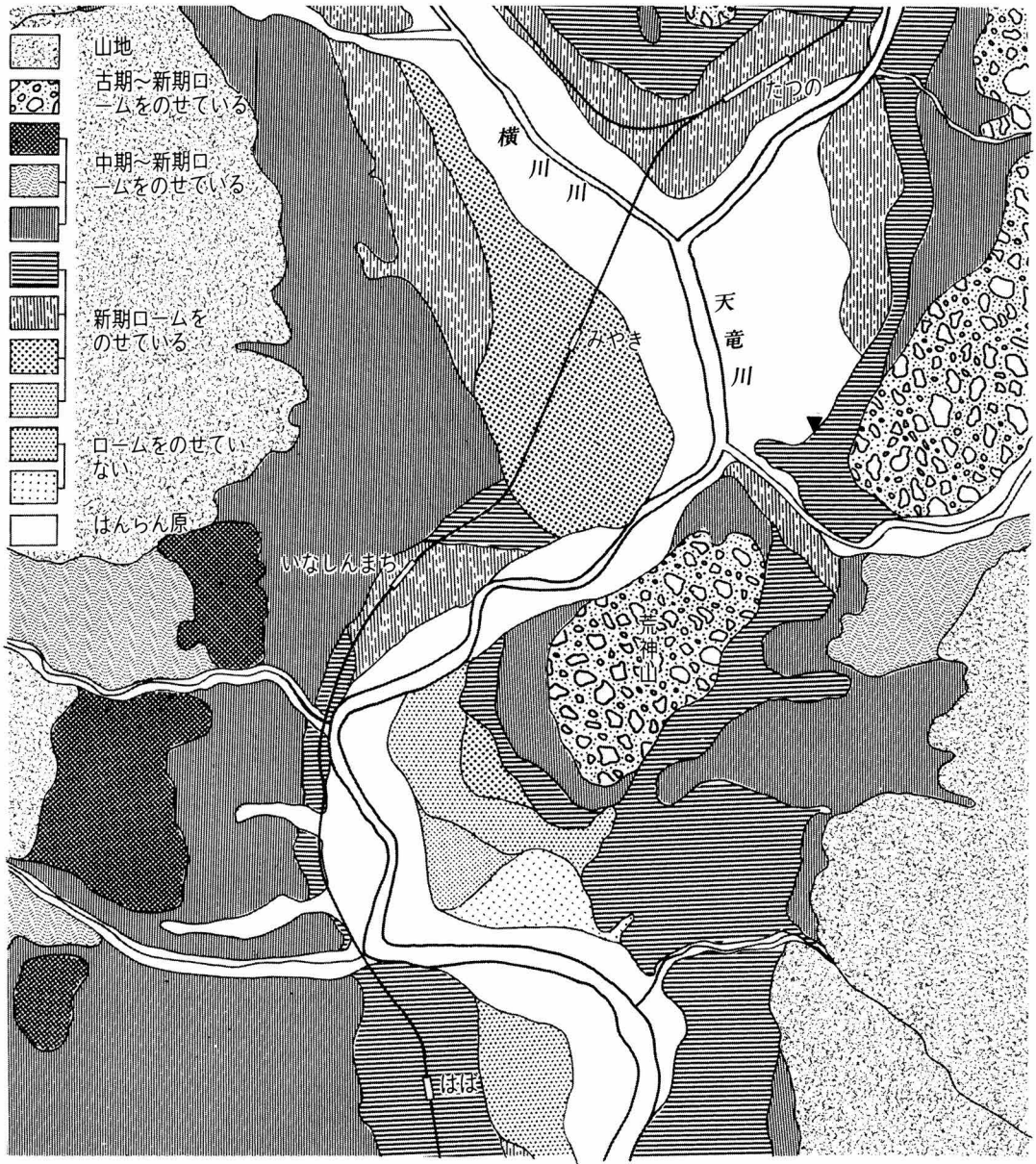
(調査日誌より)

平成元年

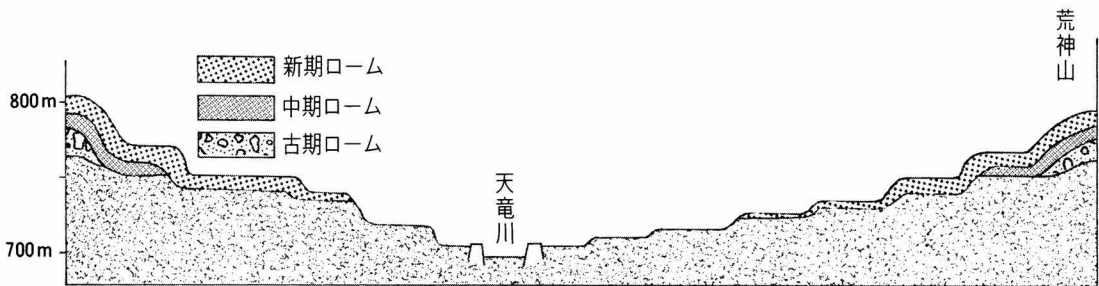
- 11月13日 重機によるトレンチ発掘を開始。かくらん土直下より住居址が検出される。
- 11月20日 第1号住居址を掘り下げる。床付近より土器が出土。
- 11月27日 住居址の平面図作成。
- 12月7日 全体測量図の作成。
- 12月11日 全体写真の撮影及び機材の撤収。

平成2年

- 11月20日 重機による表土剥ぎを行う。
- 11月27日 第2号住居址が検出される。
- 11月29日 遺構検出作業終了。第2号住居址の掘り下げを開始する。
- 12月1日 住居址の写真撮影及び平面図の作成。
- 12月3日 全体写真の撮影。
- 12月4日 全体測量図の作成及び機材の撤収。調査終了。



▼印は神送り遺跡



第1図 辰野町段丘面区分図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

辰野町は西部は木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる6つの尾根状の山塊が占め、東部は伊那山脈の北端部がのびている伊那盆地最北端に位置している。町内の平野部は町のほぼ中央部を蛇行しながら南流する天竜川と、この川の大きな支流のひとつである横川川によって多いところでは荒神山の南側では6段、北側でも4段の河岸段丘が形成され、第1段丘面と現在の氾濫原との比高はおよそ35mほどである。

また、この天竜川と横川川とによって挟まれた町内の中央やや東部には、大城山塊（標高750mから1,290m）が南北にはしっている。

これに対して伊那山脈は沢底川を境にして南部を小式部城山塊と呼び、この山塊の主陵部である小式部城山（標高1,120.3m）より北西方向に張り出した尾根によって形成され、沢底川より北部は東山丘陵と呼ばれており、辰野町地域の山地の中で最もなだらかな丘陵地帯である。この丘陵地帯は標高800mから1,000mで、上野川や前沢川などの河川がいずれも北東から南西方向に流れている。神送り遺跡はこの東山丘陵の西部にあたる第2段丘面上に位置している。この付近は塩嶺累層の上に平出層が堆積し、その上層に新期テフラの上部をのせている。また、豊南女子短期大学の造成時には西落ちとなる逆断層が観察されている。

第2節 歴史的環境

平出地区は縄文時代草創期より奈良・平安時代まで比較的多種多様の遺跡が存在している。

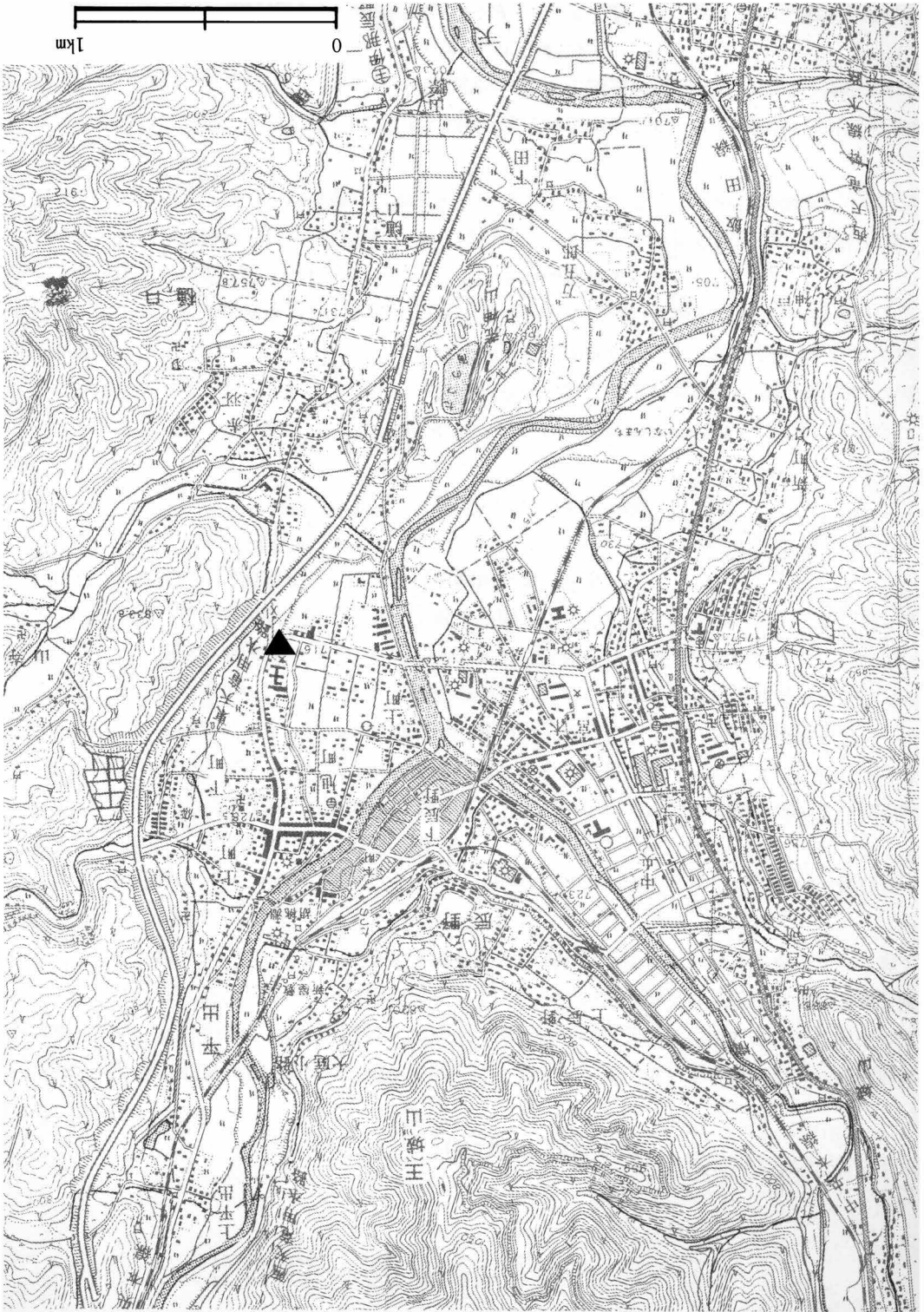
縄文時代を代表するものとしては平出丸山遺跡が挙げられる。この遺跡は現在の平出保育所の改築工事に伴って昭和57年から昭和58年にかけて調査が実施された。その結果縄文時代後期の石棺墓群が出土し、さらに石棒なども発見され、特殊な性格を持った遺跡であることが判明した。またこの下層からは縄文時代早期の集石炉や、草創期の表裏縄文が出土している。

昭和40年代に御茶屋敷遺跡では現在の味噌工場の用地内で、縄文時代中期初頭の土器が百数十点出土し、炉址かとも考えられる焼土が数ヶ所から発見されている。また前期の中越式土器も出土している。

大石平遺跡は上野川が平出の扇状地へ出る手前の右岸の山地にあり、すり鉢状の大規模な窪地の南縁付近に分布しており昭和59年に住宅用地造成に伴って調査が実施され、遺構は確認されなかったものの縄文時代中期初頭の土器片が多数出土している。

昭和48年に中央道の建設に伴って調査された上平出堂ヶ入遺跡では、縄文時代前期末葉の住居址2基、土坑8基と、中世の墓が出土している。

第2図 遺跡位置図



弥生時代の遺構は現在、半平蔵遺跡で住居址が1基出土しているにとどまっている。

古墳時代は重要な遺跡が分布している。なかでも半平蔵遺跡は26基以上の住居址が出土しており、このうち3基の住居址からは滑石製の白玉がそれぞれ1個ずつ出土しており、他の1基では金環が出土している。またこの遺跡の東方には平出古墳群があり、半平蔵遺跡との関係が考えられている。また半平蔵遺跡では古墳時代の住居址のほかにも奈良・平安時代の住居址が17基と、整然と並んだ掘立柱建物が発見されている。

平出古墳群は平出区上町の見宗寺周辺に存在していたと考えられるが、現在墳丘の残っている古墳は御陵ヶ塚古墳1基のみである。この古墳は直径20mの円墳であり、南側には横穴式石室の一部が露出している。

御社宮司古墳は明治14年の開田の際に削平され、石室の一部が残されているのみであるが、副葬品は保管されており、水晶製勾玉1点、メノウ製勾玉6点、水晶製切子玉2点、金環1点、銀環2点、鉄製轡、環状鏡板、鉄具、鉄地金銅張の辻金具、雲珠、杏葉、鐺、頭椎大刀の柄頭片のほか直刀4本が現存している。

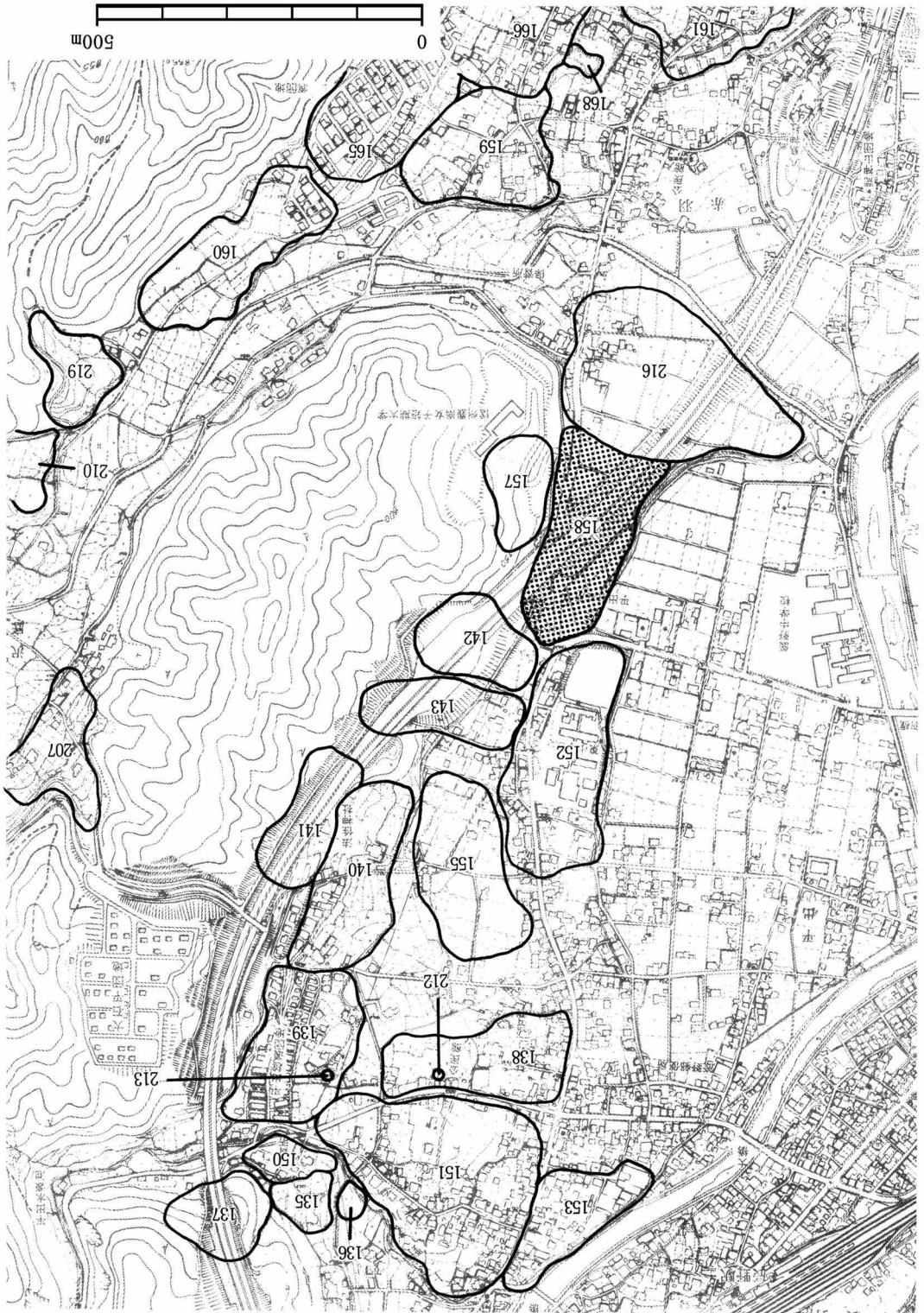
このほか『先史及原史時代の上伊那』によると、山の神古墳、見宗寺境内の古墳が遠景写真付で載っており、更に見宗寺畑、中村ノ畑の2ヶ所があげられ、山の神古墳からは轡2、3組と直刀片5点が出土していると伝えられている。

上平出の前沢川上流の山麓に分布する沢入口、沢頭、藤の森の各遺跡では平安時代の住居址がそれぞれ5基・1基・1基出土しており、灰釉陶器を伴うこれらの住居址からは鉄製品も出土しており、山ずみ集落が存在していたと考えられる。

| No. | 遺 跡 名 | 縄文 | 弥生 | 古墳 | 奈良 平安 | 中世 以降 | No. | 遺 跡 名 | 縄文 | 弥生 | 古墳 | 奈良 平安 | 中世 以降 |
|-----|-------|----|----|----|----------|----------|-----|--------|----|----|----|----------|----------|
| 135 | 原 田 | ○ | | | ○ | | 157 | 中 山 | ○ | | | | |
| 136 | 平出日向 | ○ | | | | | 158 | 神 送 り | | ○ | | ◎ | |
| 137 | 平出山の神 | ○ | | | ○ | ○ | 159 | 源 平 治 | ○ | ○ | | ○ | |
| 138 | 御社宮司 | ○ | | | ○ | | 160 | 池の久保 | ○ | | | ○ | ○ |
| 139 | 越 道 | ○ | ○ | | ○ | | 161 | 経 塚 | ○ | | | ○ | |
| 140 | 宮 の 上 | ○ | | | ○ | | 165 | 赤羽上の原 | ○ | | | | |
| 141 | 大 窪 | ○ | | | | | 166 | 板 橋 | ○ | | | | ○ |
| 142 | 公 家 塚 | ○ | | | | | 168 | 南久保窯 | | | | | ○ |
| 143 | 牧 垣 外 | ○ | | | ○ | | 207 | 神 主 屋 | ○ | | | | |
| 150 | 平出丸山 | ◎ | | | | | 210 | 堀 之 内 | ○ | | | ○ | |
| 151 | 中 村 裏 | ○ | | | | | 212 | 御社宮司古塚 | | | ○ | | |
| 152 | 半 平 蔵 | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | | 213 | 御陵ヶ塚古塚 | | | ○ | | |
| 153 | 御茶屋敷 | ○ | | | | | 216 | 神 送 南 | ○ | | | ○ | |
| 155 | 平出宮ノ前 | ○ | | | | | 219 | 洞 田 | | | | ○ | ○ |

周辺遺跡一覧表（○は遺物出土、◎は遺構出土を示す）

第3图 周边遺跡分布图



第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査の方法と調査結果の概要

今回実施した発掘調査地点は、昭和48年に行われた中央自動車道建設に伴う調査地区の北側、分布図の範囲では最も北端部に位置している。前回の調査では9世紀後半と考えられる居住址3基が出土し、今回の調査でも平安時代の住居址の出土が予想された。また、道路拡幅工事の計画の都合上本調査を2期に分けて実施した。グリッドは2m四方とし、現在の町営駐車場の北端部に基準杭を設定し、ここを基準としてグリッドを設定した。また標高は標高値が求められている工事用のベンチマーク(729.83 m)を基準点として使用した。

調査にあたっての表土除去はバックホーを使用して行い、以下は手作業で進めた。遺構の所在の確認はジョレン等を用いて掘り下げ、住居址内の排土は移植ゴテなどを使用した。

出土遺物の取り上げは表土下から遺構確認面まではグリッド別、層位別に取り上げ、必要に応じて出土位置やレベルを記録し、図化を行った。整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には遺物番号を註記した。

今回の調査の結果、出土した遺構・遺物は次のとおりである。

堅穴住居址2基(平安時代)

出土遺物総点数(土師器・須恵器・石器・陶磁器)は約120点である。

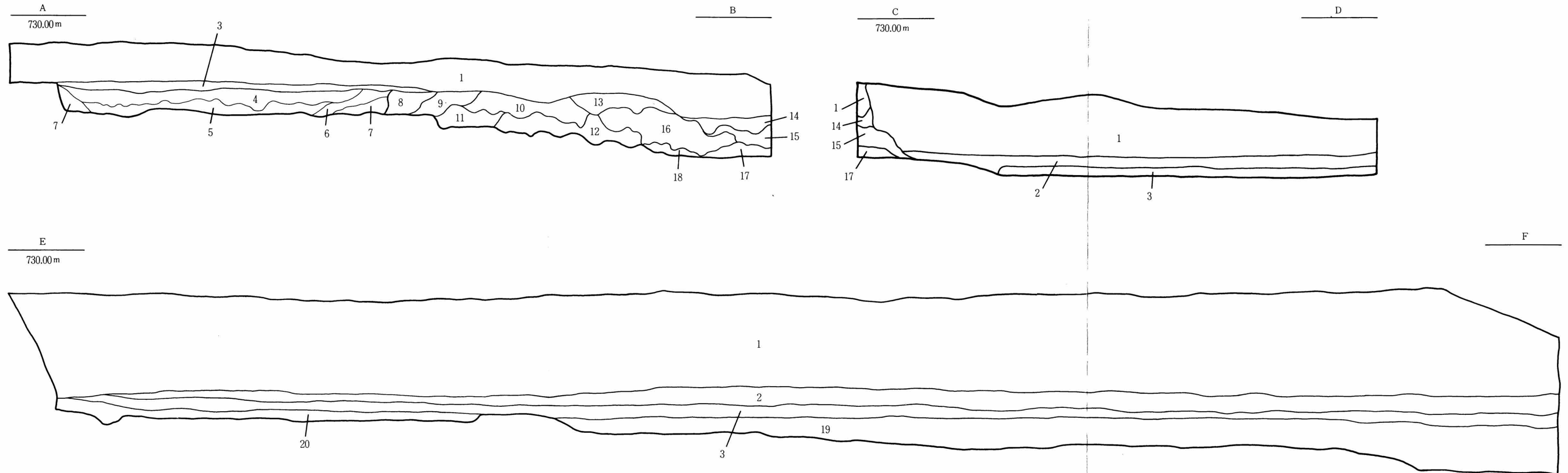
第2節 遺跡の層序

神送り遺跡の立地する第2段丘面は水田として利用されており、昭和47年には中央自動車道の建設に伴っての圃場整備事業が行われている。そのため、今回の調査地においても第1号住居址の直上層は水路を通す際にかくらんされていた。しかし第2号住居址周辺では遺構検出面である黒色土の上層に水田が作られていた。また現在の町営駐車場用地では水田を造成する際にロームにまで削平が及んでおり、今回の県道拡幅に伴う立ち会い調査によってかまどの痕跡と思われる焼土が発見されている。

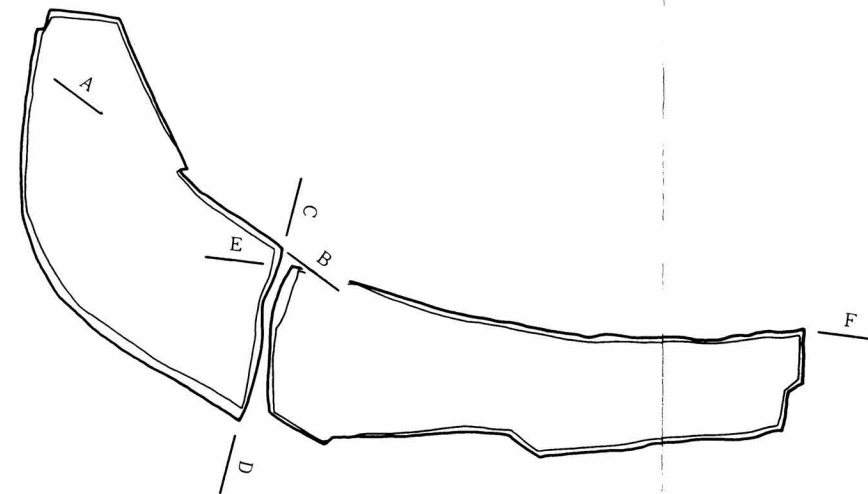
このように非常に変化の著しい地域であるため、基本層序も捉えにくいのが、水田の耕作土の下層に黒色土が堆積しており、この黒色土上層より平安時代の遺構が掘り込まれているものと推定される。なおこの第2段丘面は原地形としては南に向かうに従って若干高くなっていく緩傾斜地域であると推定され、更に中央自動車道の南側は南に傾斜している様子が伺える。このことは段丘上に小規模ながらも扇状地が形成されていた可能性が考えられよう。



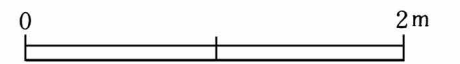
第4図 発掘調査位置図 S = 1/2500



- | | |
|------------------------|----------------|
| 1:埋土 | 13: |
| 2:耕作土 | 14: |
| 3:基盤 | 15:埋土(かくらん) |
| 4: | 16: |
| 5:住居址フク土 | 17: |
| 6: | 18: |
| 7: | 19:黒色土(黄色土粒混入) |
| 8:黒褐色土(灰色粘土やや含みしまっている) | 20:住居址フク土 |
| 9:暗褐色土(黒味かかる) | |
| 10:暗褐色土(灰色粘土やや混入) | |
| 11:黒褐色土(焼土混入、土坑?) | |
| 12:暗褐色土(粘土質) | |



第5図 調査区土層断面図



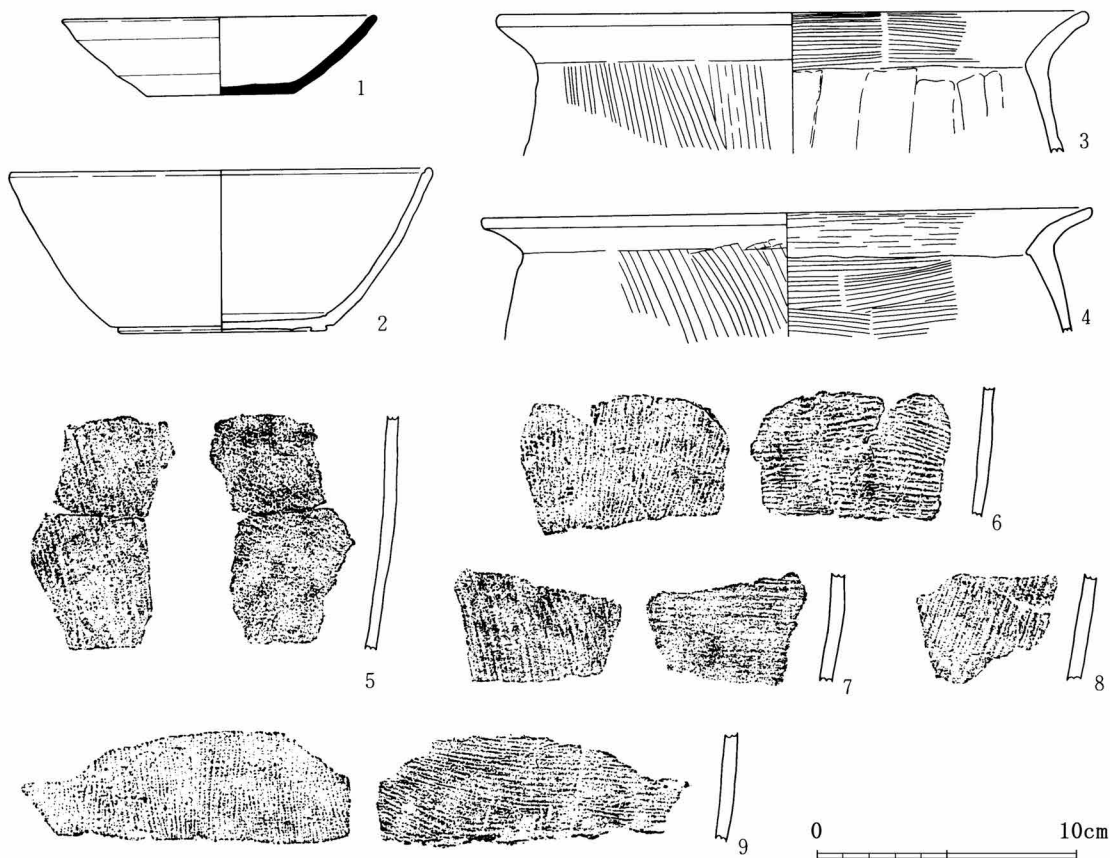
第IV章 遺構と遺物

第1節 平安時代の遺構と遺物

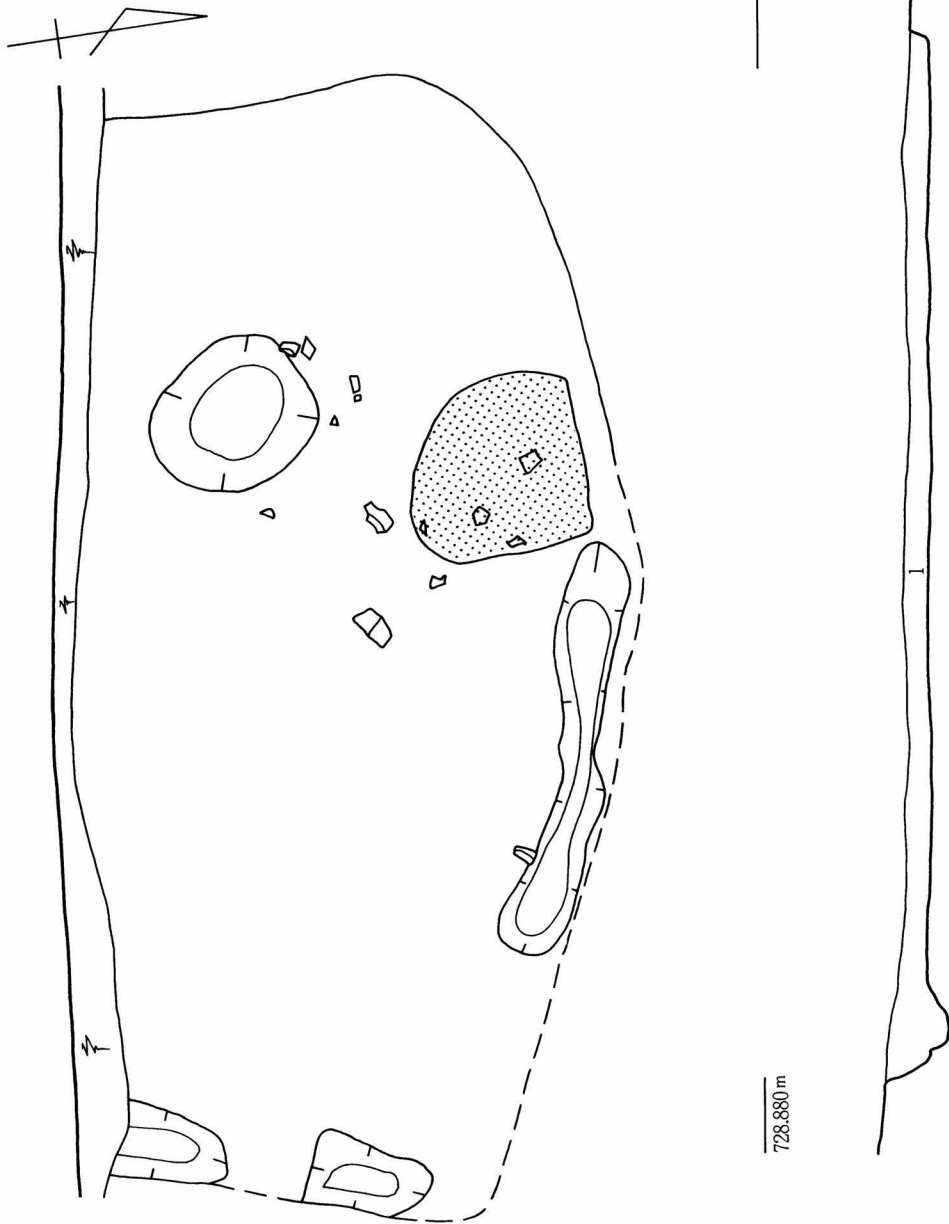
1. 第1号住居址

今回の調査区のほぼ中央に位置し、南半分は対象地区外となっている。壁面は水田造成時に削平されており、ほとんど残っていない。住居の規模は1辺9mであり、カマドは焼土が残されていたが、住居址の北西隅にあったと考えられ、この周囲より遺物が集中して出土している。柱穴はカマド付近に1ヶ所認められ、深さは約15cmほどである。なお住居址東側には周溝が確認されており、深さは4cmから9cmほどとなっている。床面は西半部に良好な貼床が残されていた。

遺物 床面およびカマドより出土しているが、いずれも破片であり、完形の遺物は出土していない。1は須恵器坏である。器高は低く大きく傾いている。底部には回転糸切り痕が残されている。2は土師器碗である。直線的にひらく体部に、ケズリ出して作られた高台をもつもので、胎



第6図 第1号住居址出土遺物 S = 1/3



1:黒色土(しまっている)

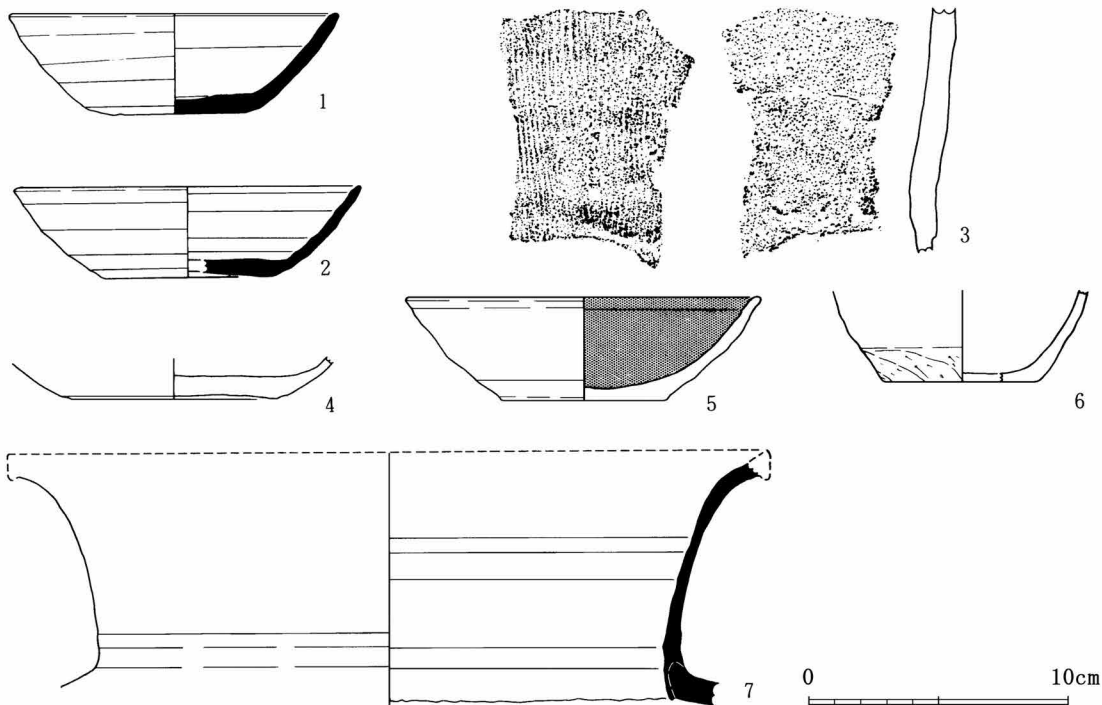
第7図 第1号住居址実測図

土のきめも細かく、色調も内・外面共に赤褐色で焼成は極めて良好である。3・4は土師器長胴甕の口縁部で、共にくの字状に屈曲している。3は口縁部内面はハケ調整が施され、体部の外面はタテ方向のハケ調整・内面はへら状工具によってタテ方向のナデ調整を行っている。4は口縁部内面にハケ調整の痕跡を留め、体部内面にはヨコ方向のハケ調整・外面にはタテ方向のハケ調整を施している。器壁は比較的薄手である。

2. 第2号住居址

調査区東端部に住居址の北半分ほどが出土しており、床面全体に良好な貼床が存在していた。住居址は水田基盤直下より黒色土を掘り下げて作られており、カマドは北壁に存在している。柱穴は3ヶ所発見され、深さはいずれもおよそ20cm程度と浅い。

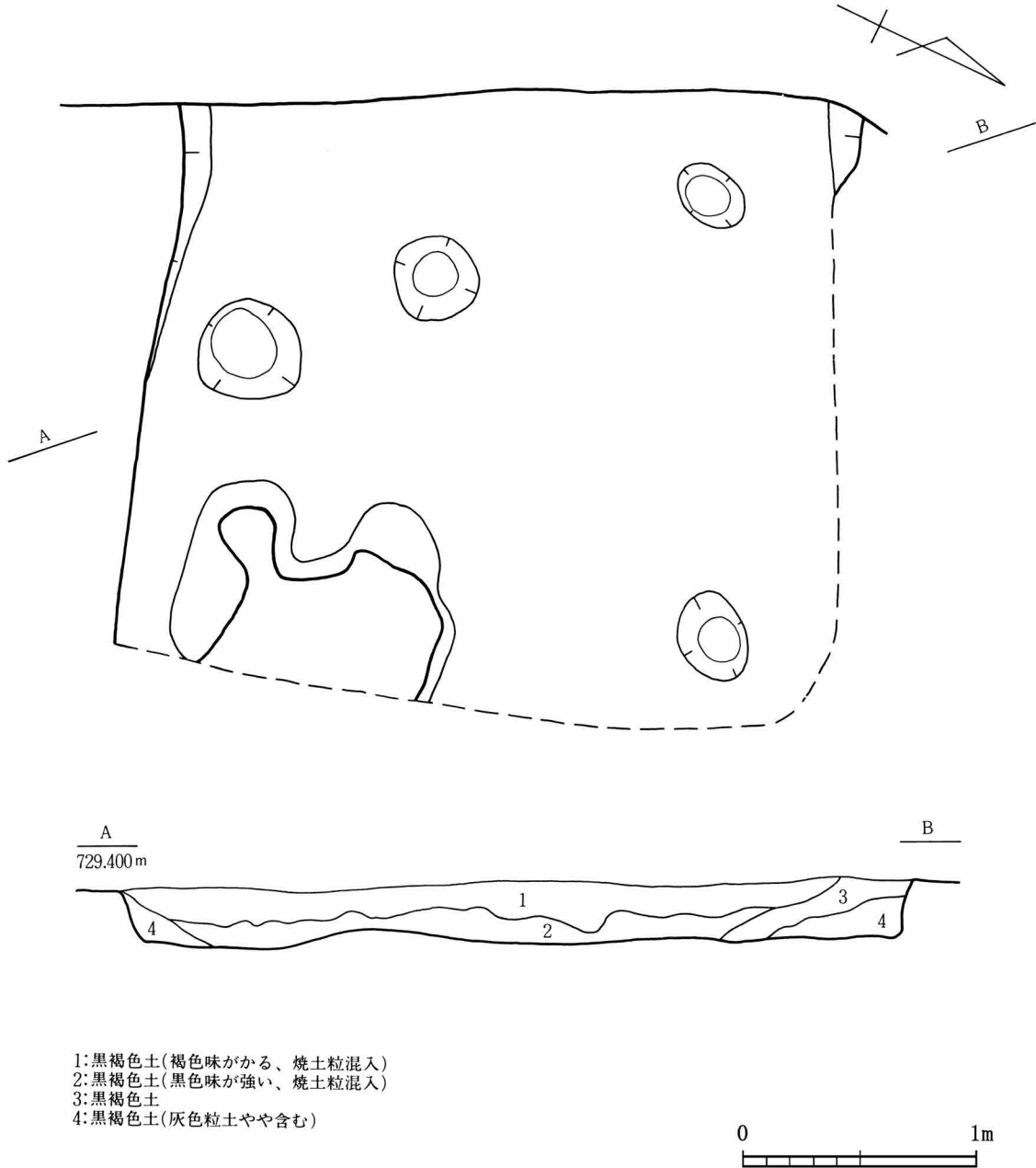
遺物 完形品はなく、すべて破片であり、遺物の点数もあまり多くない。1・2は須恵器坏である。1は器壁が厚く、全体的にシャープさに欠けている。2は1よりも薄く、傾きも大きい。底部にはやはり回転糸切り痕を留めている。両者ともに口唇部付近に弱いつまみ成形を施している。3は土師器長胴甕の体部である。外面・内面ともタテ方向のハケ調整を施している。4は土師器坏の底部である。焼成は良好であり、ロクロ成形されている。底部には回転糸切り痕がある。5は内面黒色土器である。内面へら磨きは比較的密に施される。6は甲斐型坏であり、底部は回転糸切り痕を残し、体部下は上から下への斜位のケズリを施しているが、見込み部分と体部内



第8図 第2号住居址出土遺物 S = 1/3

面・外面のへら磨きは施されていない。焼成は良好である。7は須恵器甕の口縁部であり、器形復元で口径約29cmである。

図示した遺物のほかにも細片ではあるが軟質須恵器の坏が数片出土している。また高さは4cmほどと推定される。そのほかにも高台付の須恵器坏の破片が出土している。

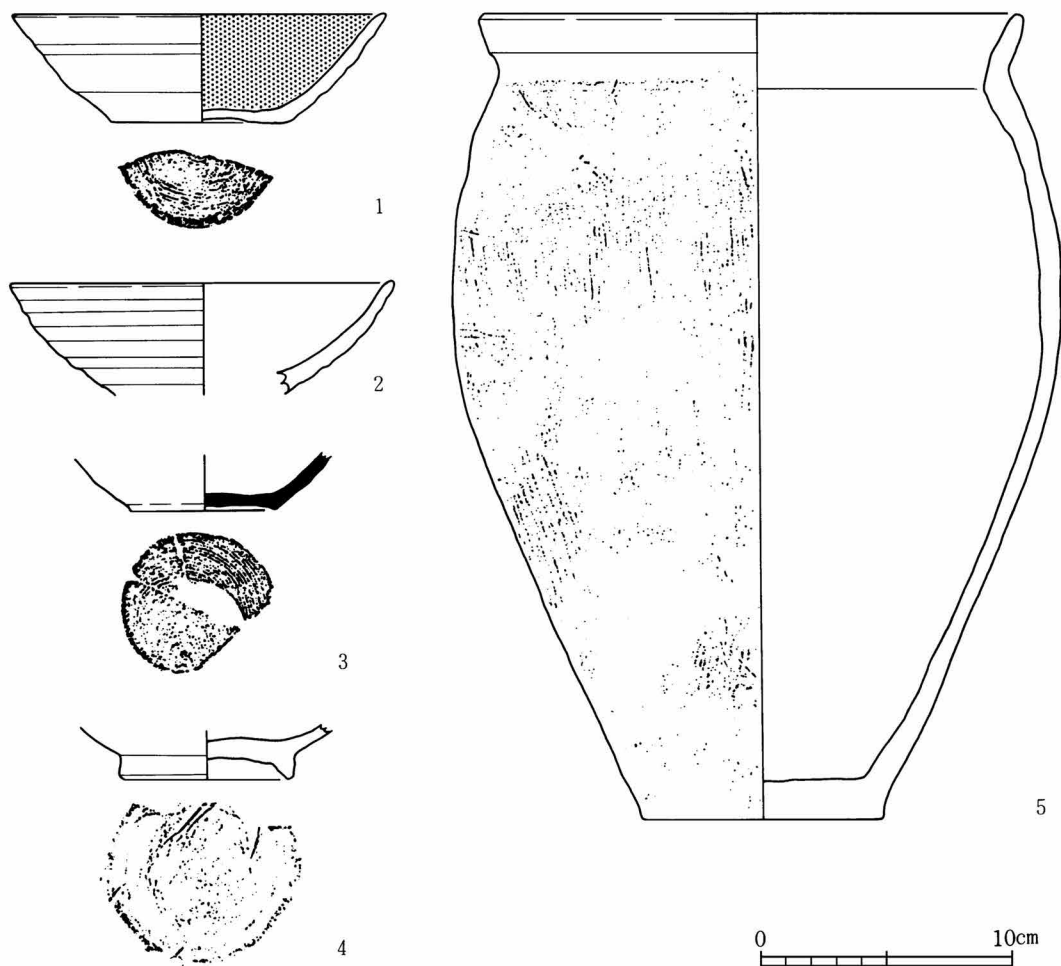


第9図 第2号住居址実測図

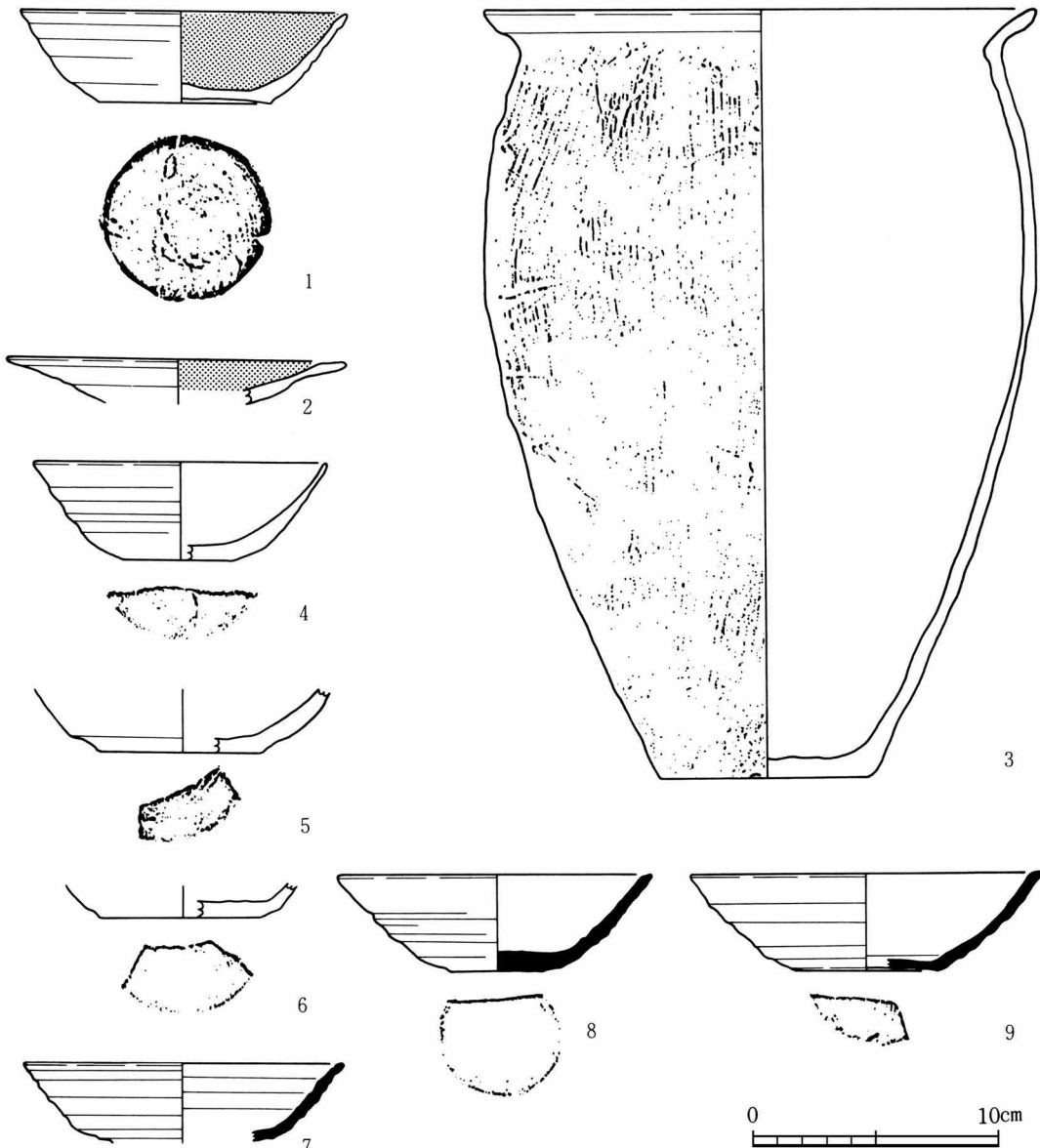
第V章 結 語

神送り遺跡は昭和48年に中央自動車道の建設に先だって調査されて以来今回は第2次調査となるが、いずれもこの遺跡の北端部を調査したにすぎず、正確に遺跡の性格を把握することは難しい。しかし今回の調査においても2基の住居址が調査され、計5基の住居址が発見されたことになる。この5基の住居址から出土した遺物を中心に述べてまとめたい。

前回の調査においては、前述のように3基の住居址が出土し、いずれの住居址からも内面黒色土器（註1）の坏が出土しており（第10図-1、第11図-1）、第1号住居址ではこのほかにも高台付の土師器碗（第10図-4）土師器長胴甕（5）須恵器坏（2）等が出土している。この住居址は須恵器が食膳具としての主位の座をあげわたしている時期と考えられ、外傾の強い須恵器坏や、



第10図 中央自動車道用地内出土の土器（第1号住居址）



第 11 図 中央自動車道用地内出土の土器（第 3 号住居址）

高台付土師器碗の出土、および長胴甕の形態においても器壁が比較的厚く、口縁の外反も弱いという特徴をもっていることなどから 7 期の末から 8 期の初頭の頃の時期（註 2）と考えられる。

第 3 号住居址は報告書でみる限り遺物の出土点数が最も多い。出土遺物は内面黒色土器（第 11 図-1・2）須恵器杯（7～9）土師器杯（4～6）長胴甕（3）である。2 は内面黒色土器の皿と考えられる。土師器杯はいずれも底径は小さく、外傾も比較的強いものとなっている。土師器杯は体部下部に強いヨコナデを施している。長胴甕は第 10 図-5 よりも口縁の外反が強く器壁も薄く仕上げられているようである。以上のことから第 1 号住居址よりも時期が遡ると考えられる。

なおこれらの住居址からは若干の灰釉陶器が出土していると報告されているが、残念ながら図示されているものはなかった。

これに対し今回調査を実施した2住居址に関しては灰釉陶器の出土はなく、第1号住居址では第IV章で述べたように長胴甕（第6図-3・4）須恵器坏（1）土師器碗（2）等が出土している。長胴甕は口縁の外反が強く、口縁に施されたヨコナデも体部のタテ方向のハケ調整にまでは及んでいないものの器壁はやや厚手となっている。また須恵器で図示できたものは1のみであるが、外傾が強いものであり、作りも粗雑な印象をうける。この住居址からは軟質須恵器が出土している。以上のことからこの住居址は7期の前半頃と考えられる。

第2号住居址では須恵器坏（第8図-1・2）が出土しており、両者とも厚手の器壁をもっており在地産の須恵器と考えられる。また土師器碗（4）甲斐型坏（6）などのほかに図示されていないが、高台付須恵器坏や軟質須恵器も出土している。甲斐型坏については体部下半にケズリを施しているもののヘラ状工具による内・外面へのミガキは全く見られず、最末期の様相を呈している。このことから第2号住居址も第1号住居址と同様に7期の前半頃と考えられる。

以上述べてきたように今回までの調査結果をみると、住居址の時期は非常に近いものであることが注目される。また松本市内での報告によると7・8期に1つの大きな画期を見出すことができ、住居址の集合形態もある時期の体系化された形を示すとしているが、（註3）神送り遺跡もこの例に該当するかも考えられる。しかし墨書土器が出土せず、鉄製品が出土する大型住居址も確認されていないなど、今後の発掘調査の成果に期待するところが大きい。

これに加えて神送り遺跡周辺には半平蔵遺跡をはじめとして南に隣接している神送南遺跡、牧垣外遺跡などといった平安時代の集落跡が数多く存在しているが、これらの集落跡に関しては十分に検討されていない点があるために神送り遺跡とのつながりを把握することは難しいものの、他の集落から派生して成立したと考えることができよう。

註

- 註1 いわゆる黒色土器と呼ばれるものと等しい。しかし外面には黒色処理が施されていない。
- 註2 ここで使用した時期区分は『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』に準じたが、この報告書での7期とは先に長野県考古学会で小平和夫氏によって発表された「伊那谷における様相」中でのⅢ期の最末期に該当すると考えられるが、今後伊那谷での詳細な編年研究が必要となってくると思われる。
- 註3 （財）長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』

参考文献

- 岡田正彦 1977 「平安時代土師器等の編年試論」 『信濃』29-9
- 上伊那誌編纂会編 1962 『長野県上伊那誌』 第一巻 自然編
- 上伊那誌編纂会編 1965 『長野県上伊那誌』 第二巻 歴史編
- 小平和夫 1987 「伊那谷における様相」 『長野県考古学会誌』シンポジウム特集号 55・56号
- 竹淵修二 1980 「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』 第1集
- 竹淵修二 1981 「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』 第2集
- 竹淵修二 1982 「辰野における河岸段丘の面区分および発達史」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』 第3集
- 竹淵修二 1983 「辰野における河岸段丘の面区分および発達史-地質構造を中心として-」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』 第4集
- 辰野町誌編纂委員会編 1989 「地形地質」 『辰野町誌』 自然編
- 直井雅尚 1989 「松本平における内黒ロクロ土師器の出現と展開」 『信濃』40-4
- 長野県編 1983 『長野県史 考古資料編』 全一巻(四) 遺構遺物
- 長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡辰野町その1』
- 長野県教育委員会 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市その4』
- 長野県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 吉田川西遺跡』
- 松崎彰一・斎藤孝正 1983 「猿投窯編年の再検討について」 『愛知県陶磁資料館研究紀要』2
- 松崎彰一 1983 「猿投窯の編年について」 『愛知県古窯跡分布調査報告書』Ⅲ
- 原明芳 1988 「松本平における平安時代の食膳具」 『信濃』



元年度調査区全景



2年度調査区全景



第 1 号住居址



第 2 号住居址



第1号住居址出土遺物(1)



第1号住居址出土遺物(2)



第 2 号住居址出土遺物 (1)

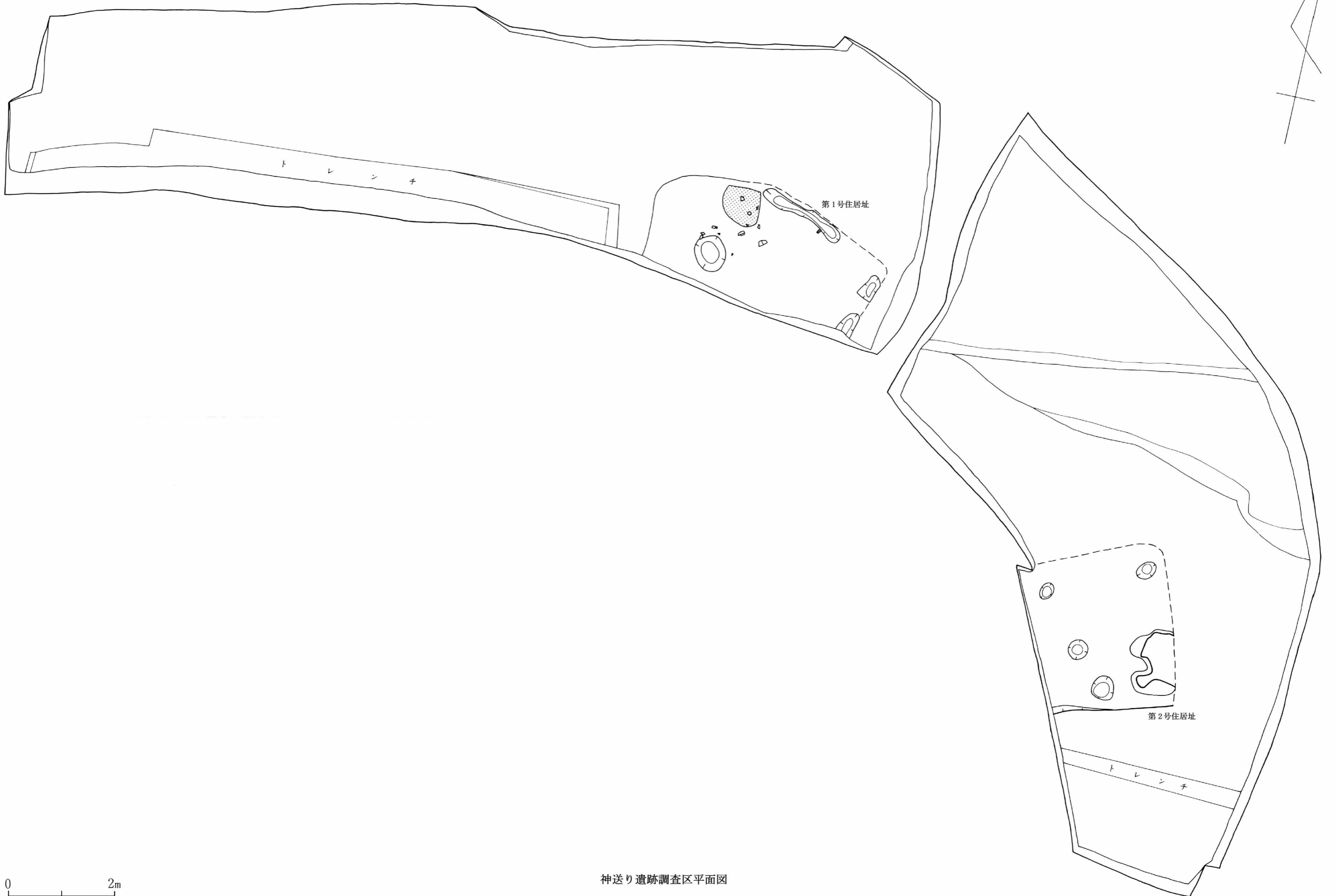


第 2 号住居址出土遺物 (2)

神 送 り 遺 跡

特定交通安全事業 伊那－辰野(停)線の拡幅
事業に伴う発掘調査報告書

発 行 日 平成3年3月25日
編 集 ・ 発 行 辰野町教育委員会
〒399-04
長野県上伊那郡辰野町中央1
☎0266(41)1111(代)
印 刷 所 精美堂印刷所



神送り遺跡調査区平面図